

31【街の散策からの気づき発見】

浄春院散策で考えさせられたこと

会員 K.T.

浄春院(春日部市小渕2156)に来ている。禅宗曹洞派のお寺で、創立は寛政5年(1464)とのことだ。日本史では応仁・文明の乱(1467～1477)といわれる戦国時代の少し前になる。お寺は掃除が行き届き、境内には凜とした感がある佇まいだ。ふと、お寺の壁にかかっていた看板が目にとまった。

「 ■墓じまい ■永代供養 ご相談ください 」

この看板で、先日のおB会での話を思い出した。お墓が他県にあり遠い、兄弟はバラバラの県に住み、地元に戻る意思はない、このため、長男である自分が終活の一つとして「墓じまい」をした、という。「いやあ大変だったよ。費用は〇百万かかり、兄弟親戚の同意、お墓の解体撤去、閉眼法要、檀家の離檀、移転先での納骨・開眼法要、自治体の書類手続き等、本当に大変、皆も元気な内に墓事情を考えた方がいいよ。」との話だった。その時は雑談の中で、『大変なんだなあ』と、聞いていたが、看板を見て、改めて、『この地域にも起きている事象なのだ。』と、思った。「墓じまい」の



現状をネットで調べると、厚生省の発表では、近年増加傾向で、2004年度6万8千件、2022年度15万6千件、とのことだ。様々な事情で増えているらしい。また、総務省の「墓地行政に関する調査(令和5年9月13日)報告」では、「人口減少・多死社会の進展や家族観の多様化等に伴い、管理する者がいなくなった無縁墳墓等が増加(後略)」とある。『永代供養とは何か?』、「NPO 法人納骨支援の会」のネット広報を引用すると、「永代供養とは、仏教の資格者(主に住職)が亡くなられた方の遺骨を大型のお墓(永代供養墓・合祀墓・合同墓など)へ納骨し、永代に渡って供養を行うこと。(中略)1985年(昭和60年)に滋賀県大津市にある天台宗総本山の比叡山延暦寺の大規模永代供養墓地が、そうとされています。(中略)1999年(平成11年)「墓地・埋葬法等に関する法律」の改正により、それまで霊園のみに永久供養墓が限られていましたが、簡略化されたため、(中略)大規模霊園開発の増加、そして個別寺院にも普及し、全国的に広がってきました。(後略)」とある。寺での供養の始まりは、江戸時代(1603～1868)に幕府が制定した寺請制度に由来する。家単位で特定の寺院に属し、葬儀や供養などの仏事を任せ、お布施や寄附で寺院を経済的に支える制度の檀家制度を起源としている。檀家制度は、慶長17年(1612)キリスト教禁教令が出され、寛永17年(1640)島原の乱の後、幕府はキリスト教徒を弾圧するために全ての住民が仏教寺院に檀家して登録することを義務づけた。「先祖代々の墓」といっても、地位の高い人や富裕層を除く、多くの庶民の場合は江戸時代からの伝統になるらしい。「永代供養」や「墓じまい」の事象は、仏事の歴史では、新しい事のように見えるが、無縁墳墓の問題は1980年代頃から社会問題としていわれるようになった。その対策として「永代供養」の需要がでてきたのかもしれない、と思う。その他ネット上には、現在のお墓事情に関する問題が、いろいろ掲載されている。NHK 仙台 WEB 特集『「無縁遺骨」ルールなき保管の実態は』 2024年10月2日 が、目に留まった。こちらは少し深刻だ。「(前略)遺骨を保管する期間が決まっていない、(中略)遺骨の引き取り手のないケースは特別なことではなくなっています。(後略)」という。また、渡邊秀樹編集『図解大全 日本の神社お寺入門』 洋泉社 2019年によれば、「(前略)現在のような碑石を建てる墓が建てられるようになったのは江戸中期以降、(中略)墓を自由に建てられるようになったのは高度経済成長期に入った昭和30年(1955)以降、じつは、ごく最近のことである。(後略)」という。「多死社会」というストレートなフレーズは人口の多い団塊世代が後期高齢者に入った最近のことだ。核家族化の進展で葬儀・戒名・年忌法要、お墓の継承、費用負担等は、様々な事情で変化している。「多死社会」では、葬儀や埋葬はより簡易な方向になるのだろう、と思う。「生死事大(生きる死ぬは一大事)」、あれこれ、考えさせられた。